

## 水の上

あふれてゐる もやを 動かし  
ゆれてゐる 波に さからひ  
速い姿の 蒸汽船は 僕ひとりに乗せて 都会の河を 下つてゐる  
ぼん ぼん 悲しさうに 輪を 飛ばし  
空に うつろな 思ひをのべる ひとつの船に 僕は  
音の さびしさに 目をそむけて 岸に はるかな 煙を眺める  
水の上には 小鳥も 飛ばず  
みちみちてゐる 波の動きは  
くろく 重たく しづみながら いつまでも  
それは いつまでも ついて来る  
河を下つてゐる 僕の心に 空しさの あふれるやうに  
蒸汽船は 叛逆にみちて 走つてゐる  
僕の さびしさを 消すために ふりすてながら 都会の河を 下つてゐる